

實に必要は機會を生む

柴田一能

三世兩重の因縁に曳れて否應なしに人間世界に生を禀けたお互が、馬鹿でも利好でも、強健でも虚弱でも、六十一歳の本卦還りまで三寸の息が繋がつて居れば、還暦でお目出たいと云ふので、身分相當のお祝ひをしたり、されたりの習慣で、更に九箇年生きのびて七十歳となると、今度は「七十古來稀なる」と云ふ意味で、古稀の賀といふ人生第二次のお祝となる。果してお祝ひに價ひするか否やは、その人達の國家社會乃至宗門に對する業績の如何に因るので、可否の資格論から言ふと中々面倒な問題となるが、兎に角七十の坂下まで辿りついた現地から、過ぎ去つた七十年間の苦樂昇沈の生活の跡を振りかへつて見ると、色々な原理を發見したり、人生問題に對する無限の教訓を受けることが尠くない。これをしも「龜の甲よりも年の功」と言ふのであらう。

表題に掲げた「實に必要は機會を生む」と云ふ命題も正にその一つである。一能が祖山常置委員の列に加へられて、重要な山務に參劃するようになったのは、三代前

實に必要は機會生む

の杉田日布法主の知遇を得てからのことで、故田中智學先生から「勅額法主」と綽名された故岡田日歸法主から現董の望月法主に至るまで、格外的恩遇を蒙つて居つた關係上、表裏いろいろの事件にも携はり、單に常置委員門末議員、山林護持會議員、祖廟備整會委員、山規改正起艸委員等の外に、祖山學院昇格問題を主眼とする學務委員に擧げられたこともあり、その後學務委員の肩書の有無を問はず、所謂因縁の逐ふ所、學院に問題が起つたり、運動が勃發したりすると「我れ關せず焉」と澄ましてゐる譯に行かず、時あつては當局側に立つて支持したこともあり、時あつては學生側に共鳴してフレー／＼を絶叫したこともあり、當局も餘り頭を痛めず、お山も無理な犠牲を拂はないで、學生年來の宿題である昇格の目的を貫徹することの出来る、絶好のチャンスをと、鶴の眼、鷹の眼で狙つてゐたのであるが、問屋の方ではオイそれと註文通りには手を拍つてくれず、彼れはれする間に數年は行雲流水と過ぎてしまつたのであるが、流石に世界開闢以來の脱皮——大轉換を遂げよう云ふ今日、我邦としては、建國二千六百年來の八紘一宇の理想を實現し、我宗門としては一天四海、皆歸妙法の祖訓を具現しよう云ふ、千古未曾有の時機に直面したのであるか

ら、澎湃たる世界文化大轉換の大浪に乗つた、此時こそ多年の宿望、願業、念願等の達成せらるべき「今正是其時」であつて、竟に學院は昇格の目的を果し、中學校は認可中學に、祖山學院は祖山専門學校にと堂々と昇格したのである。何と愉快なことではないか「實に必要は機會を生む」走筆一言を写せん、聖代に生れ合はせた光榮に感謝報恩の玄題を高唱して祝意を表する次第である。南無妙法蓮華經。

宗立學校の教育理念

求道園主 宮澤英心

私は今でこそ日蓮教團を脱して、超宗派的の立場から單獨の活動をしてはゐるが、元來が私の生家は日蓮宗であり、實に又十數年間は、日蓮宗寺院で佛飯を頂いた者であるから、教團外にゐるとは言へ、宗祖の御厚恩を忘れてはゐない。たと祖師の聖教を如何にして傳へるかに對し、一般僧侶とはその方法を異にするに過ぎない。宗門人の一部からは、今なほ私を異端者と見做し、或は謗

法罪の者といふ人もあるらしいが、然し私自身の心境から言へば、これで祖師の御意に反しないものと信じてゐる。僧籍だけが日蓮宗に屬し、形式だけが日蓮宗の法規にかなひ、口に立派なお説教をされても、肝腎な信と行とが反日蓮主義的であつては、何うかと思はれる節もある。猶また昭和維新の今日に、若し日蓮上人が再現せられたとせば、恐らく既存の教義信條に大修正を加へられて、宗門の改革を遊ばさるのでないかと思ふ。私はかうした觀點において、自分の現在なせる事業は、直接宗門のお役には立つてゐないが、幾分の恩返は出来てゐるやうに思つてゐる。

なほ私は毎月「身延教報」や「法華誌」を頂いでゐるから、之を通じて宗門の動靜を知り、その益々興隆しつゝあることを、内心ひそかに喜んでゐる一人である。殊に宗門の人材をつくる祖山學院が、このたび専門學校に昇格さるゝに至つたことは、日蓮教團に取りて、此上ない慶事と存じてゐる。法は人に依りて貴く、また法はひとり弘まるものでない。何と言ふても、法の宣布には人材を要する。法華經は三千年の歴史を有するが、それが時に榮え、時に衰へたのは、全く能弘の人にあつたことは、史實の明かに征する所である。